【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

| 都道府県名 | 栃　木　県 |
|---|---|

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

| 学　校　名 | 岩　舟　町　立　岩　舟　中　学　校 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　　年 | １　年 | ２　年 | ３　年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学　級　数 | ７ | ５ | ６ | ２ | ２０ | ３４ |
| 生　徒　数 | ２２３ | １９８ | ２１１ | ７ | ６３９ | |

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「確かな学力」を身に付けさせる学習指導の工夫
～　自己学習能力の育成をめざして　～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科（選択した理由）

全学年・全教科（　全職員による全校体制で取り組むため　）

（２）年次ごとの計画

平成14年度

○　テーマ
「確かな学力」を身につけさせる学習指導の工夫
～　自己学習能力を高める指導を通して　～

○　仮　説
生徒に学習の具体的な目標を与え、目標ごとの自己評価や単元全体の自己評価などをさせることで、自己分析する力や自ら学ぼうとする力等の自己学習能力が身に付くだろう。さらに、個に目を向けた指導や支援の工夫、各教科で身に付けさせたい学力に視点をあてた授業の実践を通して「確かな学力」の向上が図れるだろう。

○　研究内容・方法

（１）全教科共通課題の設定
生徒により具体的な学習目標を与え、自己評価させることで自己を知り、学習に関する意欲、主体性を身に付けさせる。さらに、自己評価が「Ｄ」の生徒にどれだけ支援していくか、どのような手だてを個別に行うかなどを研究する。

（２）数学科、英語科における個に応じた指導の工夫
教材開発や指導体制を中心に研究する。

（３）「岩中生に身に付けさせたい学力」に視点をあてた研究授業の実践をする。

（４）選択教科における多様なコースの開発（平成１５年度に実施予定）
いくつかの教科において、発展コースや基礎・基本コースなどを設置する。

（５）家庭学習の充実
・　生徒会学習委員会を通して学習状況調査から生徒に計画的な学習を実践させる。
・　学習指導だより「生きる力」を通して保護者の理解・協力を得る。

平成15年度

○　テーマ
「確かな学力」を身につけさせる学習指導の工夫
～　自己学習能力の育成をめざして　～

○　仮　説
生徒に学習の具体的な目標を与え、目標ごとの自己評価や単元全体の自己評価などをさせることで、自己分析する力や自ら学ぼうとする力等の自己学習能力が身に付くだろう。さらに、個に目を向けた指導や支援の工夫、各教科で身に付けさせたい学力に視点をあてた授業の実践を通して「確かな学力」の向上が図れるだろう。

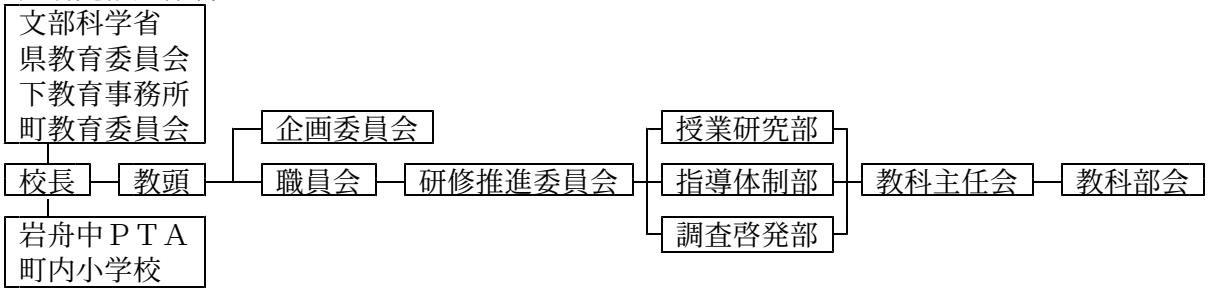
○　研究内容・方法

（１）「学習カード」の利用による自己学習能力を高める指導の工夫⇒全教科共通課題
（目標・指導と評価の一体化による個に応じた指導のための指導方法の工夫・改善）
生徒により具体的な学習目標を与え、単元全体の見通しを持って計画的・主体的に学習に取り組ませる。また、自己評価させることで、自分の学習状況の点検と学習活動の改善に活用できるようにすることで、学習に関する意欲、主体性を身に付けさせる。さらに、自己評価が「Ｄ」の生徒にどれだけ支援していくか、どのような手だて

| | |
|---|---|
| 平成15年度 | を個別に行うかなどを研究する。<br>（２）「自己学習能力」の育成をめざし、「確かな学力」の中で、特に身に付けさせたい学力に視点をあてた授業の研究・実践（教科学習の特性を生かして各教科別に）<br>（３）ティーム・ティーチングによる個に応じたきめ細かな指導の工夫<br>指導体制や効果的な学習形態・指導方法・教材開発を中心に、研究・実践する。<br>（４）選択教科における多様なコースの開発・各教科各コースでの個に応じたきめ細かな指導法の工夫・授業の実践<br>国社数理英の各教科で、発展コースや基礎・基本コースなどを設置し、個に応じたきめ細かな指導の工夫・実践に努める。<br>（５）学習指導だよりの発行や学習委員会活動などによる生徒・保護者への啓発<br>・　生徒会学習委員会を通して学習状況調査から生徒に計画的な学習を実践させる。<br>・　学習指導だより「生きる力」を通して保護者の理解・協力を得る。 |

| | |
|---|---|
| 平成16年度 | ○テーマ　○仮説　⇒　基本的には、平成１５年度の継続研究<br>○　研究内容・方法<br>（１）「学習カード」の利用による自己学習能力を高める指導の工夫<br>（目標・指導と評価の一体化）⇒全教科共通課題<br>教科や単元の学習内容に応じて、より効果的な「学習カード」の形式や活用方法を研究・実践し検証する。<br>（２）「自己学習能力」の育成をめざした、「確かな学力」の中で特に身に付けさせたい学力に視点をあてた授業の研究・実践（教科学習の特性を生かして各教科別に）<br>自己学習能力育成の構想・サイクルを意識しての授業の実践により、「自己学習能力」の育成をめざす。<br>（３）ティーム・ティーチングによる個に応じたきめ細かな指導の工夫<br>指導体制や効果的な学習形態・指導方法・教材開発を中心に、研究・実践する。<br>（４）選択教科における多様なコースの開発・各教科各コースでの個に応じたきめ細かな指導法の工夫・授業の実践<br>生徒の希望と平成１５年度の実践をもとに、開設するコースと各教科・コースでのより効果的な指導方法の実践に努める。<br>（５）学習指導だよりの発行や学習委員会活動などによる生徒・保護者への啓発<br>・　生徒会学習委員会を通して学習状況調査から生徒に計画的な学習を実践させる。<br>・　学習指導だより「生きる力」を通して保護者の理解・協力を得る。 |

（３）研究推進体制




Ⅲ　平成１５年度の成果及び課題

（１）「学習カード」の利用による自己学習能力を高める指導の工夫　⇒　全教科共通課題
（目標・指導と評価の一体化による個に応じた指導のための指導方法の工夫・改善）

Ａ　「学習カード」導入の主なねらい

ａ　生徒のねらい
- 学習状況の点検と学習活動の改善に活用する。
- つまずきチェックとその克服に利用する。
- 単元全体の見通しを持って計画的・主体的に学習に取り組む。
- 進歩の後を確認する。
- 自分のための学習であることを認識し、学習意欲を向上する。

ｂ　教師のねらい
- 個別指導に活用する。（形成的評価の一部として）
- 生徒の質問やわからなかったことに対して生徒にアドバイスする。
- 生徒の変容をつかむ。
- 生徒の到達度を確認しフィードバックさせる。

B　「学習カード」の活用パターン

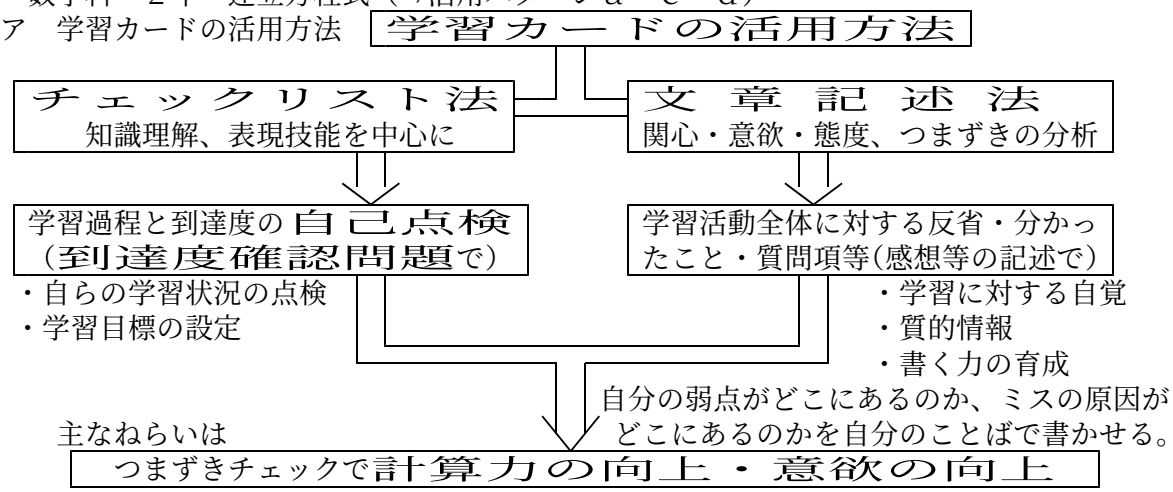
下記ａ～ｈから教科や単元の特性を考慮し、どのねらいに視点をあてて活用するかよく考え、目的意識をはっきり持って実施する。

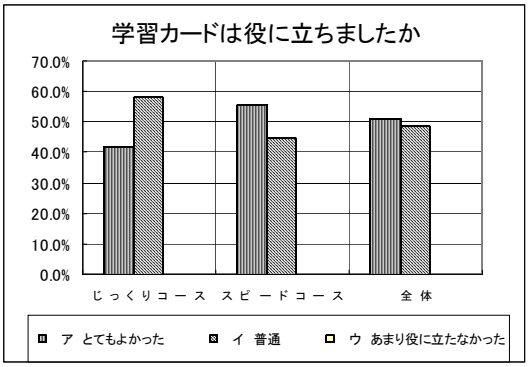
- ａ　学習状況の点検と学習活動の改善に活用（学習到達度問題等でのチェックと分析で）
- ｂ　授業の導入部分で活用（前時の学習内容の想起に）
- ｃ　学習課題の設定に活用（学習カードの中の疑問点や対立した事柄を示し、課題設定に）
- ｄ　学習形態の選択に活用（課題別・習熟度別学習などのグルーピング等に）
- ｅ　個別指導に活用（生徒の質問等に教師がアドバイスを）
- ｆ　単元全体の学習内容の把握や学習計画の作成に活用（単元全体の学習内容を示して）
- ｇ　知識・理解の定着の確認に活用(学習内容を体系的知識としてまとめた穴埋め問題で)
- ｈ　その他の活用法（学習に対する意欲化・進歩の跡の確認・生徒の変容の把握等で）

C　「学習カード」利用の実際

ａ　数学科・２年・連立方程式（⇒活用パターンａ・ｅ・ｄ）

ア　学習カードの活用方法



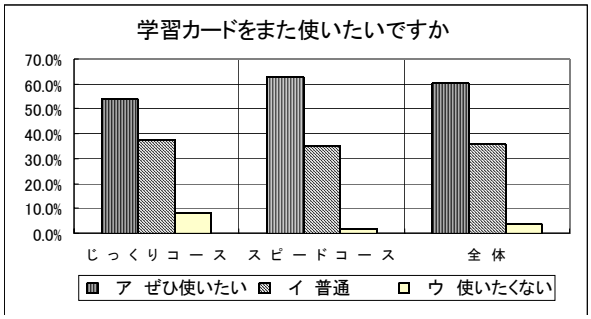




イ　生徒の様子（アンケート調査より）

※　学習カード（毎時間）は役に立ったか。

「学習カードは役に立ちましたか」という質問に、半分以上が「役に立った」残りも「まあまあ」と答え、好評だった。理由は「ミスしやすいところがはっきりしたので、どこを注意すればよいかが分かった」がもっとも多く「基礎的な計算問題ができるようになった」や「自分のつまずきの原因が分かり、先生や友達に教わりやすかった」などが多かった。単元後半に実施した習熟度別学習の授業で「じっくりコース」を選んだ数学がやや苦手な生徒の中では、「先生が質問に答えてくれたり励ましの言葉を書いてくれたりしたのでやる気になった」という理由を選んだ生徒が多く、教師サイドから見ても個に応じた指導を可能にする上で有効であると強く感じた。

| 理　　由 | じっくりコース | スピードコース | 全体 |
|---|---|---|---|
| ア　授業で何を学習するのか、ポイントがよく分かり、やる気になった。 | 20.8% | 42.6% | 35.9% |
| イ　新しく学習して、できるようになったところがよく分かり、やる気になった。 | 25.0% | 33.3% | 30.8% |
| ウ　自分のつまずきの原因が分かり、先生や友達に教わりやすかった。 | 45.8% | 38.9% | 41.0% |
| エ　ミスしやすいところがはっきりしたので、どこを注意すればよいかが分かった。 | 50.0% | 72.2% | 65.4% |
| オ　先生が質問に答えてくれたり励ましの言葉を書いてくれたりしたので、やる気になった。 | 58.3% | 16.7% | 29.5% |




※　学習カード（毎時間）をまた使いたいか。

「学習カードをまた使いたいですか」という質問に、６０％以上が「ぜひ使いたい」約３５％が「まあまあ」と答え、生徒もこの単元での学習カード利用の効果を実感したようである。「使いたくない」という生徒は約４％で、その理由のほとんどは「書くのが面倒だから」であった。

ウ　成果と課題

生徒は、学習カードをもとに、学習到達度確認問題で自分の理解度を確認し自分のつまずきの原因を分析しながら学習の見通しを持ち、克服しようと努力していた。特に、つまずきの原因を自分のことばで記入させたことは、原因を明確にする上でとても有効であったようである。

また、生徒の質問やつまずきに対して、教師がコメントでアドバイスや励ましの言葉を書いたり休み時間や次の授業の時などに指導できたことも、生徒の意欲の向上に効果的だったようである。さらに、教師サイドから見ても個に応じたきめ細かな指導がタイミング良くできるので指導と評価の一体化という面からも有効であった。

学習到達度確認問題は、毎時間の学習内容の基本問題を厳選して作成したが、それでも学習カードの記入に時間がとられてしまう(約５分)ので、授業進度がやや遅れてしまう傾向にある。記入時間の確保と自己分析力の向上(しっかりと記入できている生徒の分析文を紹介しながらレベルアップを図ってきた)が今後の課題である。

ｂ　国語科・１年生・「主題を考えよう」カメレオン・「文法の窓」単語の分類

ア　学習カードの活用方法（⇒活用パターンｆ・ｅ・ａ）

・学習のねらいと流れの把握⇒・見通しを持って学習に取り組ませる。
・個別指導に活用⇒・生徒の疑問・質問へのアドバイス
　　・生徒の到達度の確認と支援方法の改善確認
・学習状況の点検と学習に対する意欲化

イ　生徒の様子（アンケート調査より）

※　学習カードは役に立ったか。　・役に立った(７５％)・まあまあ役に立った(２５％)
主な理由
⇒・学習目標があるので何をすればよいのか目標を持って授業が受けられた。(６３％)
・毎時間の授業の内容や進み方が分かる。(３４％)
・自分のできないところが分かり、何をすればよいかが分かった。(２１％)
・家庭で復習するべきところが分かった。(１９％)

※　学習カードをまた使いたいか。　・使いたい(７５％)・まあまあ使いたい(２５％)

ウ　成果（○）と課題（●）

○　生徒はカードを活用し、自分の学習の確認ができた。
○　学習の見通しを持ち、学習目標があることで意欲的に学習に臨めた。
○　教師のコメントや励ましが生徒の学習意欲の向上につながっていた。
○　教師自身が学習に見通しを持つことができた。
●　教師の支援は，時間的なこともあり、不十分であった。

ｃ　音楽科・全学年・合唱コンクールの練習（⇒活用パターンａ・ｅ）

ア　学習カードの活用方法

合唱を作りあげるために、「意欲」「技能」「表現」を重視し、毎時間の学習内容（目標）を表示する。生徒は、目標達成に向けて活動する。自己評価をすることにより、生徒はつまづきに気付き、克服しようと努力する。

練習過程の中で、様々なことを感じたり発見したりし、それを元に生徒自ら表現を工夫し、合唱の喜びを体感していく。

・表現・技能・・・・・チェック法 → 学習活動の改善
・関心・意欲・感受・・文章記述法 → 学習活動の反省
} → 意欲の向上・技術の向上

イ　成果（○）と課題（●）

○　生徒はカード活用のねらいを理解して、目標を意識しながら意欲的に取り組んでいる。
○　感じたことや疑問点などを素直に書けるようになってきた。
○　自己評価をすることにより、次時への学習課題が明確になった。

● カードをチェックするのに時間がかかる。
● カードにより個別指導を必要とする生徒を把握することはできたが、指導するまでにはいたらなかった。

d 社会科・歴史（⇒活用パターンｇ）

ア 学習カードの活用方法

社会科の「学習カード」は、知識理解の定着をねらいにしたものなので即時に自己評価をすることができる穴埋め式問題集（せきがはら）である。生徒はこれをやることで自分が定着すべき知識が何で、それを定着できたかどうか、即時に評価できる。

(ｱ) 当該学年の授業での利用方法
・授業内容の概観・毎時間の確認テストでの利用・単元テストとしての利用

(ｲ) 当該学年の家庭学習での利用方法
・復習・定期テストでの利用

(ｳ) 上級学年での利用
・生徒の家庭学習の利用・選択社会基礎コースでの利用・３年生の復習に利用

イ ３年選択社会・基礎コース 40 名・生徒の様子（アンケート調査より）

１ [せきがはら]は、ためになりますか？

① はい ４０人 ② いいえ ０人

２ １の理由を具体的に書いてください (複数回答可)

| | | |
|---|---|---|
| ① | 重要なところが分かる・まとまっている・わかりやすい | １５人 |
| ② | 歴史の流れ・移り変わりが具体的に分かり、頭の中が整理できる | １２ |
| ③ | 復習になる | 9 |
| ④ | 覚えやすい・勉強しやすい | 8 |
| ⑤ | 定期テストや実力テスト・下野模試に出る・出題率が高い | 6 |
| ⑥ | 忘れたところを確認しながら詳しく覚えることができる | 3 |
| ⑦ | 詳しく分かる | 2 |
| ⑧ | 覚えるのが楽しい・歴史に興味がわく・基礎的な語句がきちんと載っている | 各１ |

３ [せきがはら]を改良するとしたら、何をどうすればいいですか？ 複数回答可

| | | |
|---|---|---|
| ① | 変更点はなくてよい | ７人 |
| ② | 答えを文中にいれてほしい | 6 |
| ③ | 写真・絵などを挿入する | 5 |
| ④ | 年表を入れる | 5 |
| ⑤ | 特に大切なところをわかりやすくする | 5 |
| ⑥ | 年代の覚え方を書く | 4 |
| ⑦ | 問題と答えの対応を明確にする、解答欄をわかりやすくする | 4 |
| ⑧ | 解答欄をつくる （ ）を大きくし、解答を書けるようにする | 3 |
| ⑨ | 文字を大きくする | 2 |
| ⑩ | もう少し詳しくする | 2 |
| ⑪ | 授業中に書く図をあらかじめ挿入する | 2 |
| ⑫ | 全体的に見やすく 行間を空ける | 2 |
| ⑬ | 資料を入れる・全体的な一目でわかる明確な見出しがほしい・わからない | 各１ |

４ [せきがはら]を学習していく上での課題は何ですか？

| | | |
|---|---|---|
| ① | 歴史だけでなく、地理や公民のこのような問題集が欲しい | ３２人 |
| ② | ない | 5 |
| ③ | 文章で書かれているが、これを箇条書きにしてほしい・たまには過去の問題もやってみたい・歴史の要点を押さえる | 各１ |

ウ 成果と課題

教師がわかりやすい問題集を作成し、その問題の答えまで提示してそれを学習していくので、生徒は学習しやすく基礎・基本の定着というねらいは達成しやすい。しかし、生徒の教師依存が強まり、自分から知識の定着のための学習を工夫して行わなくなるようだ。

D 成果（○）と課題（●）

○ 生徒は、学習カードをもとに、学習到達度確認問題等で自分の理解度を客観的に把握し、自分のつまずきの原因を分析しながら学習の見通しを持ち、克服しようと努力するようになってきた。

○ つまずきの原因を自分のことばで記入させたことは、原因を明確にする上でとても有効であったようである。

○　生徒の質問やつまずきに、教師がコメントでアドバイスや励ましの言葉を書いたり休み時間や次の授業の時などに指導できたことも、生徒の意欲の向上に効果的だったようである。
○　教師サイドから見ても個に応じたきめ細かな指導がタイミング良くできるので指導と評価の一体化という面からも有効であった。
○　生徒はカード活用のねらいを理解して､目的意識を持って意欲的に授業に取り組んでいた。
○　自己評価をすることにより、次時への学習課題が明確になり、意欲的になった。
○　感じたことや疑問点などを素直に書けるようになってきた。
○　教師がわかりやすい問題を作成し､その問題の答えまで提示してそれを学習していくので、生徒は学習しやすく，基礎・基本の定着というねらいは十分に達成できた。
●　数学などの学習到達度確認問題は、毎時間の学習内容の基本問題を厳選して作成したが、それでも学習カードの記入に時間がとられてしまうので、授業進度がやや遅れてしまう傾向にある。
●　同じ時期に実施する教科や各教科ごとに実施に有効な単元や実施方法等を十分に考えて実施しないと記入時間等で生徒の負担加重になってしまう。または、マンネリ化して効果的でなくなってしまう。各教科間の調整も重要な課題である。
●　カードをチェックするのに時間がかかるなど、教科によっては実施方法を十分考えないと教師にも負担加重になってしまう。
●　カードにより個別指導を必要とする生徒を把握することはできたが、指導するまでには至らなかった。
●　自己分析力の向上(しっかりと記入できている生徒の分析文を紹介しながらレベルアップを図ってきた)が今後の課題である。

（２）「自己学習能力」の育成をめざした、「確かな学力」の中で特に身に付けさせたい学力に視点をあてた授業の研究・実践（教科学習の特性を生かして各教科別に）

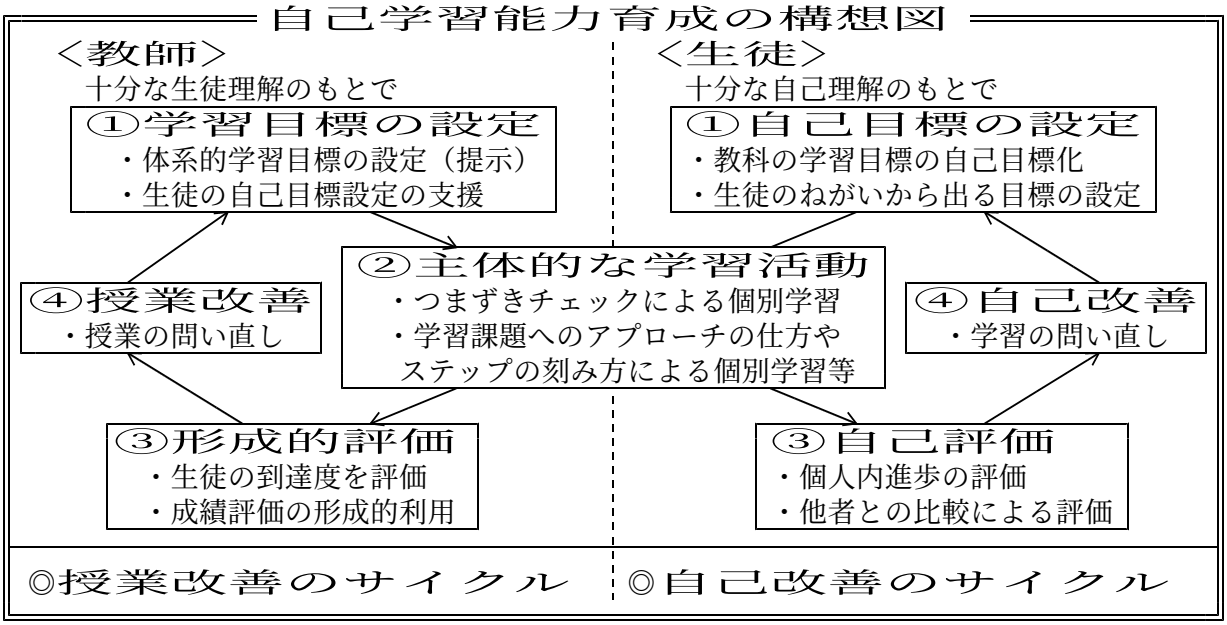
Ａ　ねらい

本校として育てたい生徒像は、「自己学習能力を持った生徒」である。

自己学習能力とは、学習の意義や価値を理解して自らの目標や課題を設定し、その目標や課題を自らの方法によって追究したり解決したりすることができる力である。

「自己学習能力」を育成するためには、「①自己目標の設定、②主体的な学習活動、③自己評価④学習の問い直しと改善」の各学習過程において、教師主導から学習者自身の主導へ自己学習のステップを段階的に進めなければならない。大切なことは、教科や学習内容の特性と生徒の実態を考慮して、各学習過程の各ステップの組み合わせを適切に選択し、「自己学習能力」を育成していくことであると考える。

Ｂ　自己学習能力育成の構想図




Ｃ　各教科の実践（社会科・数学科・理科の実践例）

ａ　社会科の実践

ア　ねらい　・グループごとの課題追究や追究内容の発表会を通して、社会的事象に対す

る多面的・多角的な見方・考え方や課題追究の方法を育成する。

イ　指導の実際　１年生「栃木県のイチゴ」

・考える視点を生徒とともに考え、グループごとの追究課題を設定する。

・課題に適した資料を選択し、グラフや表にまとめ、グループ内で考察しまとめる。

・各グループごとに、追究課題について調べて分かったことを発表する。

・他のグループの発表を聞き、栃木のイチゴが日本一になった理由を各自がまとめる。

b　数学科の実践

ア　ねらい　・「習得した知識や技能を活用し、課題を自ら解決する力の育成」

イ　指導の実際　１年生「課題学習　碁石の数を求めよう」(「文字と式」の単元の前に)

・ある規則性で並べられた５番目の碁石の数を、習得した知識や技能を活用していろいろな方法で求め、「能率的か。わかりやすいか」などの観点でその解決方法を分析する。

・よりよいと考えた方法と関連付けて、２０番目の碁石の数を求める。

・提示課題と違う規則性の問題を自分で作り、それを解いて、解決方法を分類・整理することにより、「規則性が分かれば解ける」という数学的な見方・考え方を育成する。

c　理科の実践

ア　ねらい　・自ら計画した方法で実験・観察することで、課題を解決する能力を育てる。

イ　指導の実際　音速の測定　１年生・「音の性質」

・打ち上げ花火や雷の例から、空気中の音速は光速よりはるかに遅く、充分に測定が可能であることを知らせる。そして、その測定方法を考案させ、実際に検証させる。

D　成果と課題

「自己学習能力」の育成をめざした、「確かな学力」の中で特に身に付けさせたい学力に視点をあてた授業が、各教科学習の特性を生かしながら研究・実践されるようになってきた。そして、生徒は、自分たちで課題や実験方法を考え、問題解決的な学習を行なうことにより、意欲的に学習に取り組むようになった。達成感や効力感も得られたようである。また、他のグループや友達の調べた結果を聞くことは、多面的・多角的な見方や考え方の育成にも有効であった。

しかし、各教科ともまだスタートしたばかりであり、他の教科の実践なども参考にしながら教科や単元の特性を生かした授業の実践について研究・改善を続けたいと思う。

（３）ティーム・ティーチングによる個に応じたきめ細かな指導の工夫

A　ＴＴによる指導のねらいと現状

・ねらい⇒個に応じたきめ細かな指導により、個々の生徒の学力を最大限に高める。

・　数学科⇒２年生（毎時間１Ｃ２Ｔ)・３年生（週１時間の１Ｃ２Ｔ）の授業でのＴＴ
・　英語科⇒ＡＬＴとのＴＴ
・　音楽科(合唱指導の授業)・国語科(「話す・聞く」の単元)等の特定の単元でのＴＴ

（※　特定単元で、グループ活動等にきめ細かく助言したり評価したりするという試み）

B　各教科の実践

a　数学科（２年生）の実践

ア　ＴＴの基本的な学習形態

㋐　サポート型（一斉指導で）⇒Ｔ１は全体、Ｔ２は机間指導で個別指導や支援をする。

㋑　グループ分担型１（等質の分担で少人数指導）⇒Ｔ１、Ｔ２が各グループを担当

㋒　グループ分担型２（１時間の中での習熟度別学習）⇒生徒の選択により

㋓　分離型(学習室と教室の２教室で習熟度別や興味・関心別学習)⇒生徒の選択により

イ　ＴＴの基本的な単元構想

（節の後半に習熟度別学習を実施し、個に応じたきめ細かな指導を行う）

一斉指導(㋐サポート形で)(必要に応じて㋑㋒分担形) ⇒ ・自己診断テスト・到達度確認問題（学習カード） ⇒ 習熟度別学習(㋓分離形)（生徒の選択による） ⇒ 節テスト

ウ　実際の指導の様子　連立方程式（学習カードの利用と習熟度別学習に視点をあてて）

(ｱ) 工夫した点

・　学習カードで毎時間の学習内容の理解度をチェックし、生徒にきめ細かに援助した。

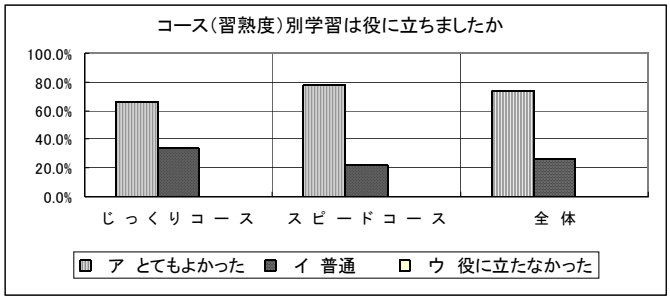
・　生徒は、到達度確認問題と文章記述によるつまずきの原因分析等で、自分の理解度をチェックした（自己評価)。そして、できない問題には、その克服に向け努力でき

るようにした。

・　「計算」と「利用」の各節の最後の授業で、生徒の選択によるコース(習熟度)別学習を実施した。つまり、じっくり(その節の基本的な内容をもう一度確認しながら基本事項の徹底を図る)コースとスピード(その節の基本問題を自分のペースで解き、さらに難しい問題にもどんどんチャレンジする)コースに別れての授業を実施した。

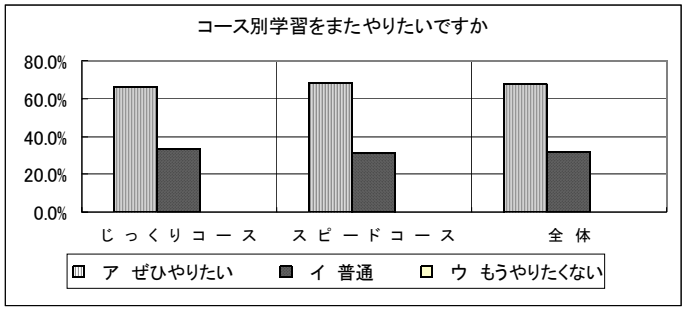
(ｲ) 生徒の様子（アンケート調査より）

★　コース(習熟度)別学習は役に立ったか。




「コース(習熟度)別学習は役に立ちましたか」という質問には、７５％もの生徒が「役に立った」と答え、好評だった。主な理由は、じっくりコースでは「授業の進め方がていねいで、わかりやすかった・ヒントカードにより、自分の力（ペース）で進められた・数学の学力が同じぐらいの友達が多いので、気軽に先生に質問できた・自分の苦手なところをよく学習できた」スピードコースでは「いろいろな問題に挑戦できた・ヒントカードにより、自分の力（ペース）で進められた」などが主なものだった。また、２つのコースとも「基礎的な計算問題は、できるようになった」と、できるようになった成就感を挙げた生徒が多かった。分かる授業の大切さを再度確認させられる結果となった。

| 理　　由 | じっくりコース | スピードコース | 全体 |
|---|---|---|---|
| ア　授業の進め方がていねいで、わかりやすかった。 | 58.3% | 37.0% | 43.6% |
| イ　基礎的な計算問題は、できるようになった。 | 79.2% | 81.5% | 80.8% |
| ウ　教科書の内容は、ほとんどよくわかった。 | 37.5% | 63.0% | 55.1% |
| エ　難しい問題も、友達と教え合いながら勉強できるようになった。 | 45.8% | 53.7% | 51.3% |
| オ　いろいろな問題に挑戦できたので楽しかった。 | 33.3% | 75.9% | 62.8% |
| カ　数学の学力が同じぐらいの友達が多いので、気軽に先生に質問できた。 | 54.2% | 11.1% | 24.4% |
| キ　良い意味でのﾗｲﾊﾞﾙ意識をもつようになり、よく勉強するようになった。 | 12.5% | 31.5% | 25.6% |
| ク　ヒントカードにより、自分の力（ペース）で進められて良かった。 | 58.3% | 63.0% | 61.5% |
| ケ　先生が一人なので,あまり見てもらえなかった。 | 4.2% | 1.9% | 2.6% |
| コ　自分の苦手なところをよく学習できて良かった。 | 54.2% | 48.1% | 50.0% |




★　コース(習熟度)別学習の授業をまたやりたいか。

「コース（習熟度）別学習の授業をまたやりたいですか」という質問に対して、全体の６８％の生徒が「ぜひやりたい」残りの全ての生徒も「まあまあ」と答え、生徒もこの単元でのコース（習熟度）別学習の授業の効果を実感したようである。

ウ　成果と課題

「計算」と「利用」の各節の最後の授業で、生徒の選択によるコース(習熟度)別学習を実施したが、多くの生徒が自分の習熟度に合ったコースを選択し各コースのねらいを達成

できたようである。これは、学習カードによる自己評価力・学習問題に対する分析力の向上によるところも大きいと思う。また、担任の先生や保護者の啓発も含め全校体制で実施できたので、意欲をなくすなどの問題もなく生き生きと授業に取り組むことができた。

じっくりコースでは、どの学級も１０名前後の少人数であったので、数学が苦手な生徒のつまずきの原因を把握しながら分からないところまで戻っての指導が可能となり、分かるまで繰り返し指導することができた。生徒も基本的な内容はよく理解できたようである。

スピードコースでは、ヒントカードなどを利用しながら、自分のペースでどんどん問題を解き、授業で扱っていないような問題にもチャレンジすることができた。分からない問題も友達同士で相談したり先生に質問したりと、とても意欲的に学習していた。

これからも、いろいろな方法や形態でのＴＴについて工夫し、各単元の学習内容に合わせてより効果的なＴＴの指導法を研究したい。

ｂ　音楽科の実践

ア　音楽科のＴＴによる指導のねらい・現状

「合唱」の単元は、生徒の自由な発想を生かし表現及び鑑賞の創造的な学習活動の充実を目指す上で、大変重要な単元である。また、本校では学校行事の一環として合唱コンクールが実施されており、生徒の合唱に対する取り組みも意欲的である。

そこで、合唱の練習では、パート練習などで個に応じたきめ細かな指導を効果的に行うために、時間割を工夫してＴＴによる指導を実施している。特に、３年生のＴＴによる合唱指導は、生徒一人一人の音楽性や表現力を高めるために有効であり、美しいハーモニーを作っていくために能率的であると考え、計画を立てて取り組んでいる。

イ　実際の指導の様子

生徒は、クラスの合唱をよりよいものに仕上げるために一生懸命考え意欲的に質問し、頑張って練習している。ＴＴを組むことでパートごとに先生が常に指導できるので、生徒の質問やつまずきにも対応し、タイミングよく適切なアドバイスができるようになった。生徒は、効果的に練習し向上していることを実感しながら練習しているので、ますます意欲的に授業に取り組むようになった。

ウ　成果と課題

きめ細かな指導が可能になり、苦手な生徒のつまずきに気づくことができた。支援することもできたので、苦手な生徒があきらめずに歌えるようになった。上手な生徒には、より高度な技術を身に付けさせることができた。生徒たちはますます意欲的になり、疑問や意見などを進んで発表し、能率的に合唱を仕上げることができた。

多様な表現方法があるため、教師同士の綿密な事前打ち合わせが必要であり、時間の確保が課題である。また、教師の授業時数の増加等、教師の負担については十分に配慮しなければならない。

ｃ　その他の教科の実践

英語科では、ＡＬＴとの授業で、ゲームやコミュニケーション活動などを行なっているが、生徒の取組は意欲的である。

また、国語科でも学校課題と関連の深い「話す・聞く」の単元で、ＴＴによる授業を実施し、グループ活動等できめ細かく助言したり評価したりするという試みを行った。個に応じたきめ細かな指導をすることができ、成果が上がっている。

（４）選択教科における多様なコースの開発、授業での個に応じた効果的な指導の研究・実践

Ａ　多様なコース設置のねらい・工夫点

ａ　ねらい　・一人一人に合った学習を徹底することで、生徒の学力を最大限に高める。

ｂ　工夫点

・各学年とも、国社数理英の５教科は、「基礎基本コースと発展学習コース」を開設。
・実技教科では、興味や関心を重視したコースを開設。（学習意欲を高める指導の工夫）
・３年生は、生徒指導上の問題(配慮生徒が１つの教科に集中してしまう)や個に応じたきめ細かな指導が可能になるよう考慮して、１～３組と４～６組に分割しての設置。

Ｂ　成果と課題

「少人数で一人一人に合った学習を徹底的にすることで、それぞれの学力を最大限に高めよう。」という目標で、多くの選択教科を設定した。特に、一人一人が得意な教科をさらに伸ばしたり不得意な教科でも意欲を持って取り組むことで克服したりできるようにするために、多くの教科で「教科書の基本的な内容をていねいに個別指導し、基礎基本がしっかりと定着できるようにしよ

うというコース＝基礎基本コース」と「教科書の内容にプラスした発展的な応用問題を多く扱い、思考力や問題解決力を高めようとするコース＝発展学習コース」を開設したが、「授業でわからなったところがわかるようになった（基礎基本コース）」という生徒の声が多かった。また、「授業ではできない問題演習や実験・調べ学習などを行えたので充実した時間となり楽しかった。問題演習をどんどん進めることができて学力が向上したと思う。（発展学習コース）」と実際に力をつけられたという手応えを感じている生徒も多いようである。

（５）学習指導だよりの発行や学習委員会活動などによる生徒・保護者への啓発

○　成果と課題

生徒会学習委員会で、家庭学習時間調査を実施し、生徒が計画的に学習するよう意識化を図った。また、学習指導だより「生きる力」を通して生徒・保護者への啓発活動を行った。

特に、テスト期間の家庭学習時間調査とお昼の放送によるクラス平均の家庭学習時間の発表はクラス全体の家庭学習への取り組む意識や学習に対する雰囲気づくりにも有効であった。また､学級活動等を利用しての効果的な学習方法の研究・紹介も各教科の学習方法を考える上で、効果的であった。

保護者に対しても、学習指導だより「生きる力」やＰＴＡ総会・学年ＰＴＡを通して，学習指導や評価に関する本校の取り組みを紹介し、啓発活動をすることができた。

今後は、生徒会学習委員会を通して、学習方法調査を実施し、各教科の効果的な学習方法等を考えさせたい。そして、生徒が効果的な家庭学習を意欲的・計画的に実践できるよう工夫したい。また、その結果や学力向上フロンティア事業の各教科の取組・生徒の様子などを学習指導だより「生きる力」を通して生徒・保護者に啓発し理解と協力を求めたい。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

・教育課程実施状況調査　　・業者テストによる全国平均との比較の推移（ＣＲＴ）
・校内実力テスト結果　　・意欲などの情意面の調査
・各教科で身に付けさせたい学力の検証

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

| | |
|---|---|
| 学力向上推進研修会 | 日時　平成１５年８月１日（金）<br>場所　岩舟町立岩舟中学校<br>対象　小山市立美田中学校教員の訪問<br>会の目的　普及啓発・情報提供・共同研究 |
| 第１回　学力向上推進研修会 | 日時　平成１５年１１月２１日（金）<br>場所　岩舟町立岩舟中学校<br>対象　下都賀地区の各小中学校<br>（特に普及地区　岩舟・藤岡・野木・国分寺・小山）<br>会の目的　普及啓発・情報提供・共同研究 |
| 第２回　学力向上推進研修会 | 日時　平成１６年１月２３日（金）<br>場所・対象・会の目的等は、第１回と同様 |

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☐　１５年度からの新規校　☑　１４年度からの継続校

【学校規模】　☐　３学級以下　☐　４～６学級
☐　７～９学級　☐　１０～１２学級
☐　１３～１５学級　☑　１６学級以上

【指導体制】　☑　少人数指導　☑　Ｔ．Ｔによる指導
☐　その他

【研究教科】　☑　国語　☑　社会　☑　数学　☑　理科
☑　外国語　☑　音楽　☑　美術　☑　技術・家庭
☑　保健体育　☑　その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　☐ 無